

2013 年度

海外研修@Stanford

報告書

(2013 年 8 月 4 日～30 日)

■準備編

□準備について（法学部 2年 吉田光希）

今夏の報告として、その準備について、特に気持ちや勉強の面に焦点を当て、これを書かせていただきます。

まず、日程の設定が、例年8月の頭から一か月程度といったものになっているため、出発は必然的に期末試験が終わった直後ということになります。よって、計画的な準備が求められると思います。とはいうものの、正直に言うと私は、荷造りは期末試験が終わってからバタバタと始め、何とか必要最低限のものを間に合わせて出発した、といった形でした。では、前もって行っておくべきことは何なのか、それについて以下述べていきたいと思っています。

私たちは最終レポートを仕上げ、そのプレゼンをする、ということが求められます。この課題を、いわば本プログラム全体を通して行っていくわけですが、事前にトピックの設定をしておくことで負担を軽減することができます。一か月弱で仕上げなければならないため、事前に決めても何ら差支えないトピック設定は、出発前に行



うことをスタンフォード大学側からも推奨されます。メールのやり取りであちらの先生やコーディネーターと相談することができるので、英語でレポートを書くことは初めての人が多いと思いますが、十分なサポート体制は整っています。そして、もちろん現地に行った後にトピックを変更したり、より詳細な設定をしたりすることは可能です。日本にいるうちに一度は大まかにトピック設定を含めたレポートの準備を行っておく、ということが到着後に大きな助けになることは間違いありません。

次に、気持ちの面ですが、私は実際に行くまで心の準備は整っていませんでした。向こうでの授業はどのようなものなのか、最終レポートとはどのように仕上げるのか、そもそも英語で上手くコミュニケーションがとれるだろうか、など不安はつきませんでした。楽

しみに思う気持ちが勝るか不安が勝るか、これは個々人の性格にもよるところかと思いますが、私は確実に後者でした。しかし、実際にプログラムが始まってみると非常に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。事前準備として不安を払拭するために行えることを考えてみましたが、正直なところあまり思いつきません。プログラムへの参加を決めたのであればそのモチベーションを大切に、現地に行ったら割と何とかなる、過去の参加者らが本プログラムをかけがえのない経験だったと言っている、といったことを信じて深刻に考えすぎず、出発前の緊張感でさえ楽しむくらいの心構えでいてください。事前授業や卒業生団体主催のオリエンテーションで日本人の友達を作っておくことや、メールのやり取り（前述のトピックの相談やその他連絡等のため向こうの先生やコーディネーターと行うことになります）で現地の方々と前もってコミュニケーションをとっておくことも、準備としてできることとして挙げられると思います。

以上、出発前の準備について述べましたが、最も大事なものは準備よりも、向こうでの経験、参加後への影響だと思います。このような貴重な機会を与えていただいたことに感謝し、この経験を踏まえた報告が来年以降の参加者の一助となれば幸いです。

■生活編

□現地での生活について（法学部 2年 米川和秀）

ALC プログラムではプログラム期間中、キャンパス内の寮でほかの参加者と共同生活をおくることになります。これは ALC プログラムの最も魅力的なことの1つでしょう。異なる英語のクラスやコーディネーターグループの人とも仲良くなることができますし、今年は ALC1 と ALC2 が同じ寮だったので、僕は ALC2 でしたが、ALC1 にも多くの友人



をつくることができました。部屋は基本的に他国の学生と同じ部屋になり、僕は日本人 2 人、台湾人 2 人の 4 人部屋でした。したがって当然、部屋でのコミュニケーション手段も英語になるわけですが、授業以外でも生活のほぼあらゆる場面で英語を使うことになるので英語力の向上にはいい環境でした。ルームメイトの 1 人であった Patrick(台湾人は皆イングリッシュネームを持っていました)は同じ英語のクラスだったこともあってすぐに打ち解

けることができ、グループワークを一緒に進めたり、彼が朝食から戻ってきても依然寝ていてクラスに遅刻しそうな僕を起こしてくれたり(笑)と彼にはいろいろ助けられました。

そんな落ち着いたルームメイトに恵まれた僕の部屋でしたが、実際に部屋にいたのは寝る時と朝くらいで、ほとんどの時間は部屋の外で過ごしていました。というのも、昼間はクラスが終わったあと友達とダウンタウンにでかけたり、アクティビティに参加したりして外出していて、夜寮に帰ってきてからは寮のラウンジやロビーの共有スペースで皆で集まって課題をやっていたからです。同じクラスの友人と課題について教えあい、他のクラスの人も加わり談笑し、といった具合に楽しみながら課題をすすめていました。ただ、話がはずみすぎて深夜・早朝まで課題が終わらず、朝食帰りの Patrick に優しく起こされるという結果を招いたことは少なくなかったのですが。しかし、そうしたことを通じて他の学生と仲を深めることができたのでいい思い出になっていますし、夜まで友達と過ごすことができるのも寮生活の利点、醍醐味ではないかなと思います。

プログラム中の生活について、ということで僕の経験、感想を述べさせてもらいました。寮で生活するというのは、一橋大学が夏期休暇中に提供しているアメリカでのもうひとつのプログラム、UCDavis での語学研修とこの Stanford でのプログラムの大きな違いの 1 つであり、実際に Stanford に参加して 1 ヶ月寮生活を送った者として、寮生活は語学研修 @Stanford を語学研修はもちろん、海外の友人と深く関わるという点についても魅力的なものにしている要素の 1 つであると感じることができました。この報告書が海外語学研修 @Stanford への参加を考えている方の参考になれば、と思います。

□寮生活について（社会学部 2 年 河原秀行）

寮生活について書きます。

まず寮そのものの環境ですが、生活が困難な程不便だということはありません。Wi-Fi にも接続できるようになっているので、日本の携帯電話や PC からでもインターネットを使えます。

特筆したいのはベッドです。添付した写真から分かるように、かなり高いです。僕は身長が 172cm あるのですが、立った状態で胸程の高さでした。このプログラムに参加する方々

はきっと、参加前の準備として英語の勉強をしたりガイドブックを買ったりするかと思いますが、その他に脚力を鍛えておくとベッドに跳び上がるのが楽になるので良いと思います。また、ベッドの上から落ちて怪我をした人もいます。寝相の悪い方は、床で寝るか、ルームメイトに縛ってもらうかすると良いでしょう。

知人には、枕や毛布の薄さについて不平を言っている人もいました。夜は冷えますから、冷え症の方などは厚めのスウェットを持っていくと良いかもしれません。お気に入りの枕でなければ寝られない人は、それも是非。



部屋はそう広くはないので、荷物は摩天楼のように高くそびえ立つベッドの下に置くのが一般的になります。そうすると懸念されるのが、後頭部です。荷物を取り出すあるいは仕舞う際、ベッドの下に屈みこみ、そのまま立ち上がろうとすると後頭部を強打します。その姿をルームメイトに見られると最悪です。恥ずかしいばかりか、私のように拙い英語力しか持ち合わせていない人の場合、この恥ずかしい状況を乗り切るための機知に富んだ冗談も機転の利いた言い訳も言えないため、ただ苦笑いしてやり過ごすしかありません。どれもこれもあの忌々しいベッドのせいです。考えられる対策としては、立ち上がる際は気を付ける、ベッドの下に荷物を置かない、常時ヘルメットを装備しておく、日頃から後頭部を強打してその痛み慣れしておく、といったところでしょうか。

上で、考えられる対策として、ベッドの下に荷物を置かない、というものを挙げましたが、実はこれは他の三つに比べ現実的ではありません。なぜなら、部屋が狭いのもありますが、寮の部屋には机が一つしかないからです（部屋にもよりますが）。また、何度も言うようにベッドは高いので、ベッドの上から荷物を落とすと破損する恐れがあります。実際に、目覚まし時計を壊してしまった人もいます。ベッドの上に置けば時計が割れ、下に置けば頭蓋骨が割れるということです。

総じて、こたつを持っていくのが最強かと思います。跳び上がる必要もなければ落ちる心配もない、暖かく、頭をぶつける心配もない上に机代わりにもなる。さらに言えば日本文化の紹介にも使えます。なぜ持っていかなかったのかと思うと、悔やんでも悔やみきれ

ません。

読み返してみると、ベッドしか印象にないみたいな文章ですね。他には、えーと、楽しいこといっぱいありますから、是非目一杯楽しんでください。

■授業

□コーディネーター（ALC1）について（法学部 1年 杉本美樹）

コーディネーターというこのプログラムにおいて大きな存在について説明します。コーディネーターは、約12名で構成されるグループに一人ずつ配属され、ALC1/2にそれぞれ6人ずついます。最初の一週間の授業や日常生活のペースに慣れるまでの間、このコーディネーター達が共に行動して生活をサポートしてくれます。主には、スタンフォードの広いキャンパスの中で教室や建物、レストラン、カフェまで連れて行く事。部屋やシャワーなど身辺、インターネットに関するトラブルの対応など。



他には最初の週末にサンフランシスコ観光があり、コーディネーターが案内して下さりました。各グループで創意工夫が凝らされた一日の観光計画をこなし、皆存分にサンフランシスコを楽しむ事ができたと思います。

コーディネーターは、ALC1/2それぞれ一人ずついるディレクターのもとで、一生懸命参加者のサポートをさせていただきます。まだ打ち解けない時期から、最後の一日までプログラムが楽しく充実したものであるのは彼らのおかげであるといっても過言ではありません。一ヶ月のあいだ集団生活を続けると様々な悩みや衝突が生じるとは思いますが、コーディネーター達に相談して問題を解決する事もできると思うので、困った時は相談相手として彼らを選ぶ事も考えてみて下さい。

また彼らはスタンフォードの生徒である事が多く、スタンフォードの生徒またはアメリカの大学生の実生活について興味がある人は多くの質問をしてみると良いと思います。普段生徒としてスタンフォードのキャンパスで生活している人の目線に立つと面白いことが

たくさん経験できます。コーディネーターの中には車を持っている人もいたのでキャンパス外まで、連れて行ってもらえる事もあります。

最後にコーディネーターをまるでサポート専門のスタッフのような説明をしてきてしまいましたが、彼らは素晴らしい友人でもあります。



噴水には一緒に飛び込み、パーティーでは誰よりも盛り上がり、夜中は率先して夜更かしを実行し、いつでも楽しい思い出の真ん中にいます。みなさんのスタンフォードでのプログラムも、魅力的で才能あふれる cool で awesome なコーディネーターと最高の思い出になる事を祈っています！

□ALC ～授業内容について～ （経済学部 2年 酒井俊介）

ALC プログラムでは午前中に 2 種類の授業 EC と TD(Effective Communication, Topic Development)があります。各々90分で、朝食を食べた後、午前中これらの授業を受けます（午後は自由時間）。EC クラスはアメリカ文化に関するトピックを扱いながら、英語によるコミュニケーションを向上させることを目的とした授業で、スピーチ、プレゼンテーション、ディベートなどが繰り返し課題として出され、一方、授業中はディスカッションを中心に進行します。また国籍の異なる友達とグループを組み、協力して課題のテーマのリサーチ・発表、キャンパスや街中で人々に話しかけ、自分のテーマのために調査をしてデータを集めるなど、なかなか厳しい宿題がたっぷり出されます。

TD クラスは英語の論文の書き方について、いかに構成していくかを基礎から練習して繰り返しライティングの課題をこなしていきます。さらに、引用の仕方、参考文献の要約をどのように論文に組み込んでいくかなど、細かい所まで先生が丁寧に教えてくれます。中盤からは個々がそれぞれの最終論文のテーマに向けて取り組みます。友達や先生と書いたものを見せ合い、フィードバックをもらって、ライティング能力を向上させていきます。

これら以外にも、週に1回、計3回スタンフォードの大学院生から、ジェンダー・移民問題・社会階級といったトピックのアメリカ文化に関する社会学の講義を受けます。さらにあとでその内容のディスカッションやテストをして理解度を測ったりします。



と説明してみると、なかなか厳しいプログラムと思われそうですが、自分のいた section6 のクラスでは授業中アットホームな雰囲気です。皆、英語できてはじめは困りましたが（笑）。また、確かに宿題は相当だされるのですが、自由時間も多いのでメリハリをつけてやると遊ぶ時間もたくさん作れます。したがって、ALC ではタイムマネジメントをしっかりと管理することが肝要です。

あと重要なのは授業への「積極性」で、成績もこれが大きく反映されると思います。自分の印象としては、台湾人の学生は積極的に手をあげて発言するのに慣れているように思いました。また、プレゼンテーションは練習しただけ、本番も自信と余裕を持って発表できます。

□授業内容について（法学部 3年 岩瀬詩織）

ALC の最初にはクラス分けテストがあり、その結果を基に6つの section（1 section につき約12名）に分けられます。クラスメートの国籍も、偏りがでないよう調整されています。1ヶ月間、この section メンバーとともに協力し合いながら日々の授業・数々の課題を乗り越えていくことになります。

授業は午前中の3時間、ECクラスとTDクラスを受けます。さらに週1日、レクチャーを受け、その内容について理解を深める Discussion クラス（ほとんどゲームしかしませんが…）があります。授業の雰囲気は日本とは大きく異なり、受け身型ではなく、全員参加が求められます。しかし心配には及ばず、授業の印象を一言で表すなら「フレンド

リー」という言葉を当てたいくらい、先生は私たちを家族のようにも友達のようにも慕って下さり、とても和やかな空気でした。

EC (Effective Communication) クラスは、その名の通り、コミュニケーション方法を学ぶ授業です。最終週の10分間プレゼンテーションをゴールとしています。それに向けて簡単なスピーチ、グループプレゼンテーションを行ったり、**audience** の関心を惹く方法、効果的なプレゼンテーションソフトの使い方等を学んだりしました。また、ECのプレゼン・TDの研究ペーパーに使うデータ収集のためにアンケート・インタビューも行うので、その際の話しかけ方、質問事項の様式等も学びました。このアンケートは全く見知らぬ人に答えていただくもので、キャンパス内、近隣の街、駅等で行いました。日本で行おうにも、おそらく答えてくれる人はなかなか見つからず、とても高いハードルだと感じるでしょう。しかしアメリカではたいいていの人が協力を快諾して下さり、感謝すると同時に文化の違いに驚きもしました。他にも、英語のスラングやイディオムも扱いましたが、これは生活の中ですぐに実践できるものだったので、楽しく身に付けることができました。



TD (Topic Development) クラスは、自分で決めるトピックについて研究ペーパーを書き上げることがゴールです。テーマの絞り方から始まり、自分の論の中心となる **Thesis statement** の書き方、**Thesis statement** の後ろ盾となる記事の探し方、記事の良し悪し、引用文の使い方、読み手の関心を惹く **introduction** の書き方等、研究ペーパーの書き方を

1から学べます。私はプログラム参加前はせいぜい大学のレポートしか書いたことがなく、研究ペーパー（しかも英語）など仕上げることができるのかと不安でした。しかし、1ヶ月の授業・課題をしっかりとこなしていればいつのまにかペーパーの骨格は固まっていたし、先生にも気軽に相談できる環境だったので、経験などあまり問題ではなかったです。締め切り直前こそ徹夜する勢いで大変でしたが、研究ペーパーが出来上がった瞬間は、それはもう、達成感に満ち溢れたものでした。

ALC で過ごす 1 ヶ月間は、とてもハードなものになるでしょう。基本毎日課題が出ました。Time Management がしっかりできれば良かったのですが、私はアクティビティには出来るだけ参加したかったし、フリータイムは遊びたかったので、課題は夜遅くにやっていました。午前 3 時以前に寝られた日は 2、3 日あったかな、というレベルです。しかし、そんなハードな毎日を乗り切ったことは必ず誇るべき貴重な思い出になります。さらに、夜遅くに焦りつつも雑談しながら共に課題と闘ったり、忙しい中予定を合わせて数々のグループワークをこなしたりしたクラスメート達との友情は最高の収穫になりました。1 ヶ月で英語のスキルも当然得られますが、プログラムを終えた今思うのは、生涯通じて付き合っていきたい友達と出会えたこと、人生に影響を与えるほど自分の考え方を变えてくれたこと、というのが、私にとって ALC 最大の価値だったということです。

□授業内容について（社会学部 2 年 森田千晶）

ALC プログラムでの授業は、英語力に応じて Section1 から Section6 まで 6 クラスに分かれます。一つのクラスは大体 12 人くらいで、プログラムが終わるころには家族のような存在になります！ちなみに私は Section2 に所属していたのですが、日本人 6 人、台湾人 5 人、中国人 1 人のクラスでした。皆、積極的に国籍の違う人と仲良くなろうとしていて、とても仲の良いクラスでした。Section2 の LINE が、プログラム終了後も稼働しているくらいです♪

授業は EC(Effective Communication)と TD(Topic Development)の二つがあり、各 90 分ずつ行われます。

EC は、日常会話で使う英語のイディオムを学んだり、時には教室の外に飛び出して、現地の一般の方にインタビュー・アンケートを行うこともありました。人見知りで少々ヘタレな私にとって、『見ず知らずの人に話しかける(しかも英語で！)』という行為は自殺行為に他なりませんでした。しかしここはアメリカ！皆さん本当にフレンドリーで、こんな英語も満足に話せない日本人相手に時間を割いてくださって、最後には決められた人数以上にインタビューを行うという境地にまで辿り着きました。そして EC のメインはプレゼンテーションです。自分の自己紹介から始まり、グループプレゼンテーション、そして最終的には自らのリサーチプロジェクトについてなんと 10 分も発表するという大掛かりなプレゼンテーションも行いました。

この授業を通じての一番の収穫は、度胸だと思います。知らない人に話す機会や、クラスの前で発表する機会は、普段生活していてもなかなかありません。英語力の低さを嘆く前に、『とりあえず話してみれば、言いたいことの少なくとも半分は伝わる』くらいの気持ちで行動すれば、得るものは大きいと思いますし、そして何よりも今後英語を学ぶモチベーションにも繋がると思います。



TD では、自分で決めたトピックについてリサーチペーパーを書くことが最終目標です。トピックの精度を高めることから始め、関連記事の収集、インタビューとその分析、と段階を追って本格的なリサーチペーパーを作成しました。私のクラスでは、先生がどんなに細かい質問でも親切にフィードバックをしてくださり、最後までやり抜くことができました。しかし、計画的に進めなければ、提出前夜は徹夜になります(笑)計画性は大事だと改めて実感しました。

Stanford での授業は少しハードですが、その分努力はきちんと評価され、やりがいがありました。毎日出る宿題も、午後に(授業は午前中に終わり、午後はフリーです)計画的に進めれば、力になりましたし、遊ぶ時間も確保できました。“Work hard, play hard” の精神がしっかり刻み込まれた一ヶ月でした。

□リサーチペーパーについて (法学部 2年 濱祐実)

プログラムでは自分の興味のあるアメリカの文化に関するトピックを選び、最終的にリサーチペーパーにまとめ、クラスでプレゼンします。授業はこの最終課題へ向けて進行します。午前中に2つのクラスを受講しますが、1つはEC (Effective Communication) ではグループワークをしたり、プレゼンの仕方を勉強し、もう一方のTD (Topic Development) ではエッセイの書き方を学びます。以下リサーチペーパーについて書きたいと思います。

一週目は自分が選んだトピックの中から明らかにしたいことを細かく絞っていきリサーチクエスチョンを設定し、それに対する仮説とサポートセンテンスを立てます。トピックは街頭インタビューをすることを念頭に置いて選んだ方が良いでしょう。クラスの友人は、スタンフォードの学生と日本の学生の比較をやろうとしていましたが、プログラムの期間中は夏休みのためキャンパス内にスタンフォードの学部生は少なく苦労していました。（私自身 EC のグループワークでスタンフォードの学生の課外活動を調べるときに **survey** をしましたが、なかなか学生を見つけられず、学生かなと思って声をかけた人も 8 割は **graduate** でした。）また先生は意見と事実を区別することや、その事実が本当に自分の意見を補強するものかという点を強調していました。

2 週目は本やインターネットで探した文献の要約やサンドイッチ式の引用の仕方やペーパーの構成を学び、**survey** の質問を考えます。比較的に時間の余裕のあるこの段階で研究の動機や仮説などを述べる **introduction** など書ける部分は書いておくのが楽です。

そして **survey** を実施します。1 人で見知らぬ人にアンケートをお願いするのは緊張しましたが、キャンパスにいた人は親切で快く答えて下さり、英語を話す自信となりました。3 週目の木曜日が **rough draft** の提出日でしたが、ここが一番の山場でした。他の人も夜遅くまでパソコンに向かっていたと思います。**rough draft** といってもできるだけ完成に使い形で提出した方が良いでしょう。参考文献のリストのミスや引用の間違いを先生から指摘してもらえます。指摘された点を修正し、さらに付け加えをしてリサーチペーパーを最終提出した時は達成感を感じました。

私は結構な時間をペーパーに費やしていましたが、授業最後の日に TD の先生から「本当に頑張っていた。難しいテーマだけどよくやった。」という言葉と満点の評価を頂き、努力を認めてもらえて本当に嬉しかったです。普段のレポートでは、仮説を立て自分で調査することはあまりないので良い経験でした。

■企業訪問

□企業訪問について（商学部 2 年 小川玲佳）

こんにちは。私は 2013 年度 ALC に参加しました。この文章を読んでもらっている方の中には、今年の夏に参加しようかと考えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私の体験が、皆さんの参加への動機付けになれば幸いです。ここでは企業訪問に焦点を当

ててご紹介していきたいと思います。

ALC の参加者は全員、企業訪問をすることができます。訪問する企業はたくさんある企業候補の中から自分の希望を出して、抽選で決まります。その候補の中には、かの有名な Facebook, Apple, Google などもあります。私は MOTOROLA と Google の 2 社を訪問しました。以下、それぞれについて紹介していきたいと思います。

1. MOTOROLA

MOTOROLA は 1928 年に設立された、情報・通信業を主に行っている会社であり、現在は Google の子会社になっています。MOTOROLA にはコーディネーターの友人が勤務していたので、その方が会社を案内してくれました。最初に驚いたのが、日本企業とは大きく異なる、オープンな雰囲気です。デスクの周りや壁を自己流にアレンジしていたり、社内のあらゆる所に装飾が施されていたりするなど、たくさん遊び心が隠されていました。特筆すべきはラウンジです。MOTOROLA にはとてもお洒落なバーのようなラウンジがあり、そこで自由に飲み物やお菓子がいただけるのです。しかも全て無料! また、会社の中にはゲームセンターもあり、社員の方々が休憩時に遊びに行くことも多いのだそうです。何よりも、社員の方が皆、自分の仕事に誇りを持ち、楽しそうに働いていたのが印象的でした。





2. Google

今や知らない人はいないのではないかとと思われる、有名企業 Google。私は日本にいた頃から Google の訪問を楽しみにしていました。Google では、十数年前に ALC に参加していらっしゃった台湾人の OB の方が案内してくださいました。Google を訪問して驚いたのは、会社の敷地内のいたるところにクリエイティブな製品があることです。巨大なスマートフォン、まるで自分がその土地に移動したかのように感じられる 3D の Google earth、最新の電気自動車のための水素スタンド……。時代の最先端を行く技術は本当に目を見張るものばかりでした。また、社員が働きやすいように、プールやその他スポーツ施設、無料のカフェテリアなどの設備もとても充実していました。働いている方も皆、もっとすばらしい製品を作ろうと、常に向上心を持っているようでした。最後に、Google ショップでそこでしか売っていないオリジナルのお土産を買うこともできます。



この他にも、たくさんの興味深い企業を訪問した友人もいます。是非、日本の企業との違いを肌で感じ取ってみてください。スタンフォード大学は立地的にもシリコンバレーに位置しており、世界有数の企業とのアクセスがとても便利なので、是非これを活かしてたくさんの企業を訪問していただければと思います。

最後になりましたが、私の稚拙な文章を読んでくださってありがとうございます。これを読んでくださった方が ALC に参加して、最高の夏が送れることを祈って、筆を置かせていただきます。

■観光

□観光について（商学部1年 石濱征太郎）

この短期留学プログラムでは、授業やコーディネーターによるアクティビティーのみならず、観光しに行く機会は豊富に存在します。もちろん、コーディネーターによる初めての週末にグループでサンフランシスコへ一緒に観光しに行くチャンスもあるのですが、こちらは自分でサンフランシスコまでいけるように、そして日本人の他大



(Union Square にて)

や台湾・中国の方との親睦を深めることが目的なので、集団行動で基本的に移動することもあり、スリル感に溢れていないです。個人的には、台湾人・中国人の友達や日本人の友達と一緒にサンフランシスコに行き、一緒に観光地をまわることをお勧めします。このコラムでは、①観光する際に注意すべき点、②サンフランシスコの回るべきスポット、を記したいと思います。

① 観光する際に注意すべき点

サンフランシスコでは公共交通機関も発達しておらず、バスにしてもダイヤ通りでないことはもちろん、系統が複雑極まりないです（最後までよく分かりませんでした）。最終的にはタクシーを利用しました。割り勘すれば一人当りは安くなるし、迅速で信頼できるのでいいと思います。また、観光ガイドを一冊、日本から持参すると安心です。ブッ



クストアで販売していることはしていますが、母国語で慣れているものの方が便利かと思っています。Caltrain のダイヤに注意しておきましょう。土日だと本数は一時間に一本だったり、終電が 22:30 頃だったりするので、計画的に観光しないと帰れません (SF~Palo Alto 間はタクシーで 200 ドルぐらいだそうです)。

②サンフランシスコ観光

以下のような見所を紹介したいと思います。

i .金門橋(ゴールデンゲートブリッジ)

ii .アルカトラズ島

1 つ目の金門橋は言わずもがなのような気もしますが、これを見ないでサンフランシスコに本当に来たとは言えないでしょう。自分は、西海岸に来るのが初めてであったので、特別な感慨を受けました。思ったよりも壮大でした。



(アルカトラズ島)

アルカトラズ島は、実は行こうと試みたのですが、事前に予約が必要である、ということもあって、上陸は断念せざるを得ませんでした。そもそも、あまりの人気の連絡船に乗船することが出来なかった。なので、もし本気で流刑地として有名なアルカトラズに行きたいのであれば、日本の米国観光に関するサイトで調べることを勧めます。

TD や EC の授業の課題に追われて、なかなかバランスを保つのが難しいと思うのですが、こういう課外活動で Stanford での日々を充実させて行って欲しいと願わんばかりです。全力で楽しんでください！

□観光について (商学部 2 年 正田瑤子)

Palo Alto は Stanford 大学内を走っている無料バスを使えば 10 分 (歩いて 40 分) とかからず着いてしまうプチ観光地。Caltrain の駅に隣接している数百メートルのにぎやかな通りである。雑貨屋、お土産屋、文房具屋、お菓子屋、レストラン、カフェ、劇場、アップルストア等アメリカらしさが詰まったお店が所狭しと並んでいて ALC のメンバーも気軽に足を何度も運ぶ何度も運ぶ程だった。San Francisco Giants のお土産専門店は選手グッズのレ

パントリーが豊富であるし、食べ物屋は
ネタ系から行列が出来るクッキーサンド
アイスクリーム専門店まであった。レス
トランもまるで図書館にいるような本棚
のインテリアが凝らされたおしゃれなハ
ンバーガーショップもあれば、アメリカ
風和食レストラン、エスニック・地中海
レストラン、チーズケーキ専門店まで目



白押し。8月の24、25日は年に1回の Culture Festival が行われていていつもの通りが車の
代わりに絵画や骨董品、露店が立ち並んだ。その週末はビッグサイズの焼きとうもろこし
や牛串、クラムチャウダーを片手に買い物する人でにぎわった。

Caltrain は 1 時間に 1 本の間隔で運転している日本の新幹線と電車の中のような交通
機関である。車内は2階まであり自転車を停める専用スペースもあった。San Francisco や
Great Mall に行くには Caltrain は不可欠。

San Francisco の目玉のゴールデンゲートブリッジは霧がかかっていたが、格好の写真ス
ポットだった。風が強く寒かったけれどサンフランシスコ市街を一望出来る美しい橋で、
サイクリングを楽しむ人も見受けられた。ゴールデンゲートブリッジが見える近くの芝生
で寮から持って来たリンゴ・スナック菓子・サンドイッチのアメリカ式弁当を広げて、リ
ンゴ真っ二つ割りブームが起きたり芝生に寝転がったり楽しんだ。

チャイナタウンはアメリカの雰囲気から一風変わって中国語の会話が飛び交っていて活



気があった。中華スイーツや中国風デザイ
ンの建物も立ち並ぶ。漢方薬店でのえげつ
ない材料や生々しい光景を目の当たりにす
る。入った中華レストランは味も本場らし
かった。出された料理も何故かもやしが器
と受け皿の間に挟まっていたり、量の多さに
残そうとすると店員から食べるように指示
されたり、接客から何まで楽しいショック
の連続で飽きの来ない街だった。

Palo Alto 駅から Caltrain で 8 駅のサンホゼ駅からさらにバスで乗り継いだ所に規模最大級のショッピングモール、“Great Mall”があった。8 月の中旬はセール期間中でブランド店が多かったがお店の種類も多様で行ったメンバーは皆散財した。“Buy 2, Get 1 Free”が買い物欲を後押ししたのかもしれない。